

# 田子山遺跡第 121 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 2

埼玉県志木市教育委員会



# はじめに

志木市教育委員会  
教育長 白砂 正明

ここに刊行する『田子山遺跡第 121 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、平成 23 年度に教育委員会が受託事業として発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

田子山遺跡については、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世、近代までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。

さて、今回報告する第 121 地点の調査内容ですが、縄文時代早期の集石や遺物包含層、中・近世の土坑 1 基などが検出されました。遺物では、縄文時代早期の撚糸文系土器などが出土しました。

このような貴重な成果が得られ、志木市の歴史にまた新たな 1 ページを追加することができました。

今後もこうした新発見が、郷土の歴史研究に、ひいては幅広い学術研究に役立てられることを切に願うものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた土木工事主体者並びに土地所有者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げる次第です。

# 例 言

1. 本書は、平成 23 年度に発掘調査を実施した、埼玉県志木市に所在する田子山遺跡第 121 地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、分譲住宅建設に伴う記録保存を目的として、工事主体者である株式会社たすく（代表取締役 佐藤善孝）から委託を受け、志木市教育委員会が調査主体者となり実施した。
3. 土器の拓本・実測を除く整理作業・報告書刊行作業については、有限会社アルケアーリサーチ（取締役 藤波啓容）に支援業務を委託した。
4. 本書は、尾形則敏・徳留彰紀が監修し、編集は藤波啓容が行った。執筆は第 1 章第 1 節を尾形則敏、第 2 章を徳留彰紀、その他を藤波啓容が行った。
5. 土器の拓本・実測は、星野恵美子・大橋康弘・高田美智子・林 ゆき子・増田千春・松浦恵子・村田浩美が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは田中 歩、写真撮影は松本和延が行った。
6. 表土剥ぎ作業及び埋戻し作業については、株式会社大塚屋商店（代表取締役 綱島正人）に委託した。
7. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

## 8. 調査組織

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	白 砂 正 明（平成 20 年 4 月～）
教 育 政 策 部 次 長	丸 山 秀 幸（平成 23 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 長	土 岐 隆 一（平成 21 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 主 幹	松 井 俊 之（平成 23 年 1 月～）
生 涯 学 習 課 主 査	尾 形 則 敏（平成 21 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 主 任	松 永 真 知 子（平成 18 年 4 月～）
〃	武 井 香 代 子（平成 22 年 4 月～）
生 涯 学 習 課 主 事	徳 留 彰 紀（平成 22 年 4 月～）
志木市文化財保護審議会	神 山 健 吉（会長） 井 上 國 夫・高 橋 長 次・高 橋 豊・内 田 正 子（委員）

## 9. 発掘作業及び整理作業参加者

### ○発掘作業

調 査 担 当 者	尾 形 則 敏・徳 留 彰 紀
調 査 員	深 井 恵 子
調 査 補 助 員	鈴 木 浩 子・星 野 恵 美 子
発 掘 協 力 員	江 口 美 智 子・大 橋 康 弘・林 ゆき子・松 浦 恵 子
重機オペレータ	田 中 三 二（株式会社大塚屋商店）

○整理作業・報告書刊行作業

調 査 員 青 木 修・深井恵子

調 査 補 助 員 鈴 木 浩 子・星野恵美子

整 理 協 力 員 大 橋 康 弘・高田美智子・林 ゆき子・増田千春・松浦恵子・村田浩美

10. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校

江 原 順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・斉藤 純・齋藤欣延・  
斯波 治・渋谷寛子・鈴木一郎・照林敏郎・野沢 均・早坂廣人・堀 善之・  
前田秀則・松本富雄・柳井章宏・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

11. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については下記のとおりである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）／平成23年9月13日付け 教生文第5－681号

○埋蔵物の文化財認定について／平成24年2月27日 教生文第7－275号

## 凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行  
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3. 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。

4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6. 遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

D = 土坑 S = 集石 P = ピット

---

# 目 次

---

はじめに

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	8
第2章 発掘調査の概要	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査の方法と経過	9
第3章 検出された遺構と遺物	12
第1節 旧石器時代	12
(1) 概 要	12
(2) 遺構外出土遺物	12
第2節 縄文時代	12
(1) 概 要	12
(2) 集 石	13
(3) 遺物包含層	14
(4) ピット	23
(5) 遺構外出土遺物	24
第3節 中世以降	31
(1) 土 坑	31
(2) ピット	31
第4節 時期不明	32
(1) ピット	32
第4章 調査のまとめ	37

図 版

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)	2
第 2 図	田子山遺跡の調査地点 (1 / 3,000)	7
第 3 図	確認調査時のトレンチ設定図 (1 / 200)	10
第 4 図	遺構分布図 (1 / 80)	11
第 5 図	遺構外出土遺物 (4 / 5)	12
第 6 図	6号集石 (1 / 30)	13
第 7 図	6号集石出土遺物 (1 / 2・1 / 3)	13
第 8 図	包含層遺物出土分布図 (1 / 100)	15
第 9 図	包含層出土遺物 1 (1 / 2)	17
第 10 図	包含層出土遺物 2 (1 / 2)	20
第 11 図	包含層出土遺物 3 (1 / 3)	22
第 12 図	3・17・20・21・22号ピット (1 / 30)	24
第 13 図	遺構外出土遺物 1 (1 / 2)	25
第 14 図	遺構外出土遺物 2 (1 / 2・2 / 3・1 / 3)	29
第 15 図	216号土坑 (1 / 30)	32
第 16 図	12号ピット (1 / 30)	32
第 17 図	12号ピット出土遺物 (1 / 3)	32
第 18 図	時期不明ピット (1 / 30)	33

## 表目次

第 1 表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
-------	---------------	---

## 図版目次

図版 1	1. 調査区近景 2. 表土剥ぎ作業風景 3. 1区遺構確認状況 4. 1区包含層遺物出土状態 5. 1区包含層遺物出土状態 6. 1区包含層遺物出土状態 7. 1区包含層遺物出土状態 8. 1区包含層遺物出土状態
図版 2	1. 6号集石礫出土状態 2. 6号集石完掘 3. 反転 4. 2区全景遺構確認状況 5. 216号土坑完掘 6. 216号土坑セクション 7. 2区完掘全景 8. 埋戻し作業風景
図版 3	1. 旧石器時代出土遺物 2. 6号集石出土遺物 3. 包含層出土遺物
図版 4	1. 包含層出土遺物
図版 5	1. 包含層出土遺物 2. 遺構外出土遺物
図版 6	1. 遺構外出土遺物 2. 12号ピット出土遺物



# 第1章 遺跡の立地と環境

## 第1節 市域の地形と遺跡

### (1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北 4.71 km、東西 4.73 kmの広がりを持ち、面積は 9.06 km<sup>2</sup>、人口約 7 万 1 千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の 3 本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した 12 遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた 14 遺跡である（第 1 図）。

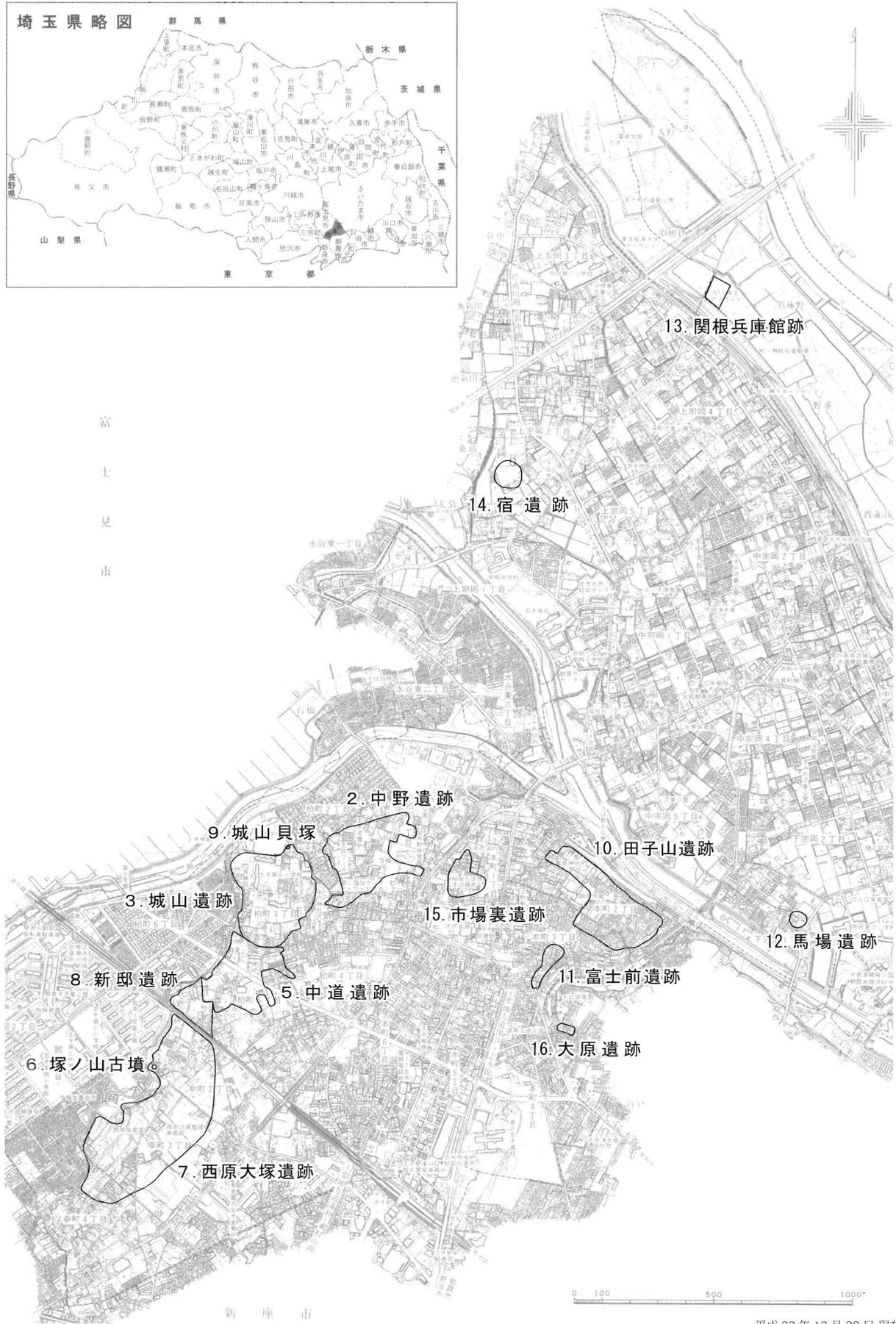
No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	79,360 m <sup>2</sup>	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	50,500 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800 m <sup>2</sup>	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	163,930 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m <sup>2</sup>	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m <sup>2</sup>	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	65,000 m <sup>2</sup>	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈、平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m <sup>2</sup>	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m <sup>2</sup>	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m <sup>2</sup>	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800 m <sup>2</sup>	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m <sup>2</sup>	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
	合計	477,900 m <sup>2</sup>					

平成 23 年 12 月 28 日 現在

第 1 表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



富士見市



新座市

平成23年12月28日現在

第1図 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)

## (2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7年(1995)度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの挟入石器・剥片など32点が出土している。

平成20・21(2009・2010)年度にかけては、城山遺跡第62地点の発掘調査が実施され、1ヶ所の石器ブロックが検出されている。

平成22(2010)年3月～5月にかけて発掘調査が実施された城山遺跡第63地点では、5ヶ所の試掘坑を設定し調査を実施したところ、立川ローム層の第Ⅵ層を中心とする3ヶ所の石器集中地点が確認され、黒曜石の二次加工剥片・石核などが20点ほど出土している。

### 2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2007)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された前期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で黒浜式期、城山遺跡では諸磯式期の住居跡が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

### 3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が550軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

### 4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施さ

れた第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に7世紀前半から中葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、7世紀前半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5 mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7 mの不整形円で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

また、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点の調査を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33 mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

## 5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。最新では、平成20～21（2008～2009）年の城山遺跡第62地点の調査により、平安時代の住居跡から皇朝十二銭の一つである「富壽神寶」<sup>ふじゅしんぼう</sup>が2枚出土しており、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点から、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

## 6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻国雑記』(註2)に登場する「大石おおいし信濃守しなののかみのやかた館おおいし」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊おおつかじゅうぎよくぼう」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう(神山 1988・2002)。

また、平成7(1995)年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子(イネ・オオムギ・コムギなど)も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8(1996)年度に発掘調査が実施された第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓(スラッグ)、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。また平成13(2001)年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。戦国期の資料としては、平成6(1994)年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧よろいの札さねである鉄製品1点と鉄鍬1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

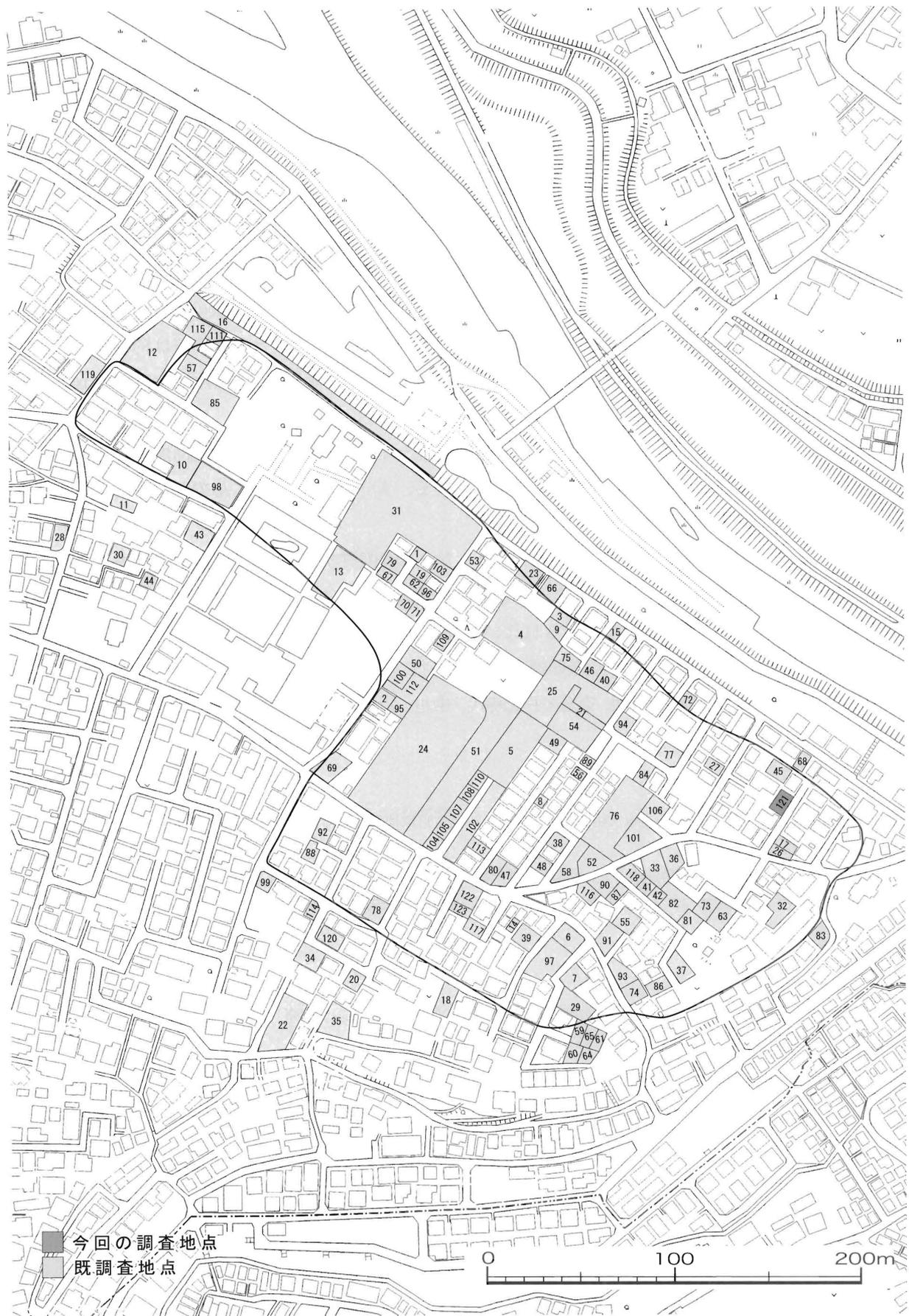
平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7(1995)年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60(1985)年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15(2003)年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院しょうりんざんかんのんじだいじゆいん」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

## 7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造(明治2～5年)に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行



第2図 田子山遺跡の調査地点 (1 / 3,000)

われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

---

---

## 第2節 遺跡の概要

---

---

ここでは、今回本書で報告する田子山遺跡について簡単に概観することにする。

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は約15m、低地との比高差は約10mであり、北西―南東方向に約200m、北東―南西方向に約480mの広がりをもち、遺跡面積65,000㎡の規模を有している。

遺跡の周辺を眺めると、北側は際立った断崖地形になっており、その先には新河岸川を臨むことができる。また、本遺跡の東側には「谷津地」と呼ばれる、大きな谷が入り込んでおり、この開析谷に面して富士前・大原遺跡が分布している。

遺跡の現況は、古くから個人専用住宅を中心とした小規模住宅が密集している地区であったが、平成5年以降、急速に進められたマンション・分譲住宅建設といった中規模開発によって、より一層宅地化が進行し、畑地・空地がほとんど見られない状況にある。

本遺跡は、昭和63年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、縄文時代草創・早・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世、近代の複合遺跡であることが判明している。

### [註]

- 註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原伸右衛門仲恒なぬしのみやはらなかえもんなかつねが、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

### [引用・参考文献]

- 神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号  
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

## 第2章 発掘調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成23年2月、土木工事主体者兼土地所有者である株式会社たすく（代表取締役 佐藤善孝）より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。工事計画は、志木市本町二丁目1680-2（145.73㎡）内に分譲住宅建設を行うものである。

教育委員会は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田子山遺跡（コード11228-09-010）に該当するため、概ね下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施した上で、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

2. 確認調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、保存措置を講ずること。また、現状保存及び盛土保存が不可能である場合については、記録保存（発掘調査）を実施する必要があること。

同21日、教育委員会は、確認調査依頼書を受理し、3月9日に確認調査を実施した。調査区の長軸方向にトレンチを4本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代早期後半の土坑4基を確認した（第3図）。教育委員会は直ちに工事主体者に確認調査の結果を報告し、同時に埋蔵文化財の保存措置を要請した。

同8月、保存措置に関する協議を行った結果、敷地全域において十分な保護層が確保できないため、記録保存（発掘調査）として取り扱うこととした。

同25日、教育委員会は、土木工事主体者から提出された志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書を受理し、土木工事主体者と事前協議を実施した。同9月1日、土木工事主体者と志木市（志木市長沼明）の間で、埋蔵文化財保存事業に係る協議書を取り交わし、同日、委託契約を締結した。

以上により、教育委員会を調査主体に、平成23年9月12日より発掘調査を実施した。

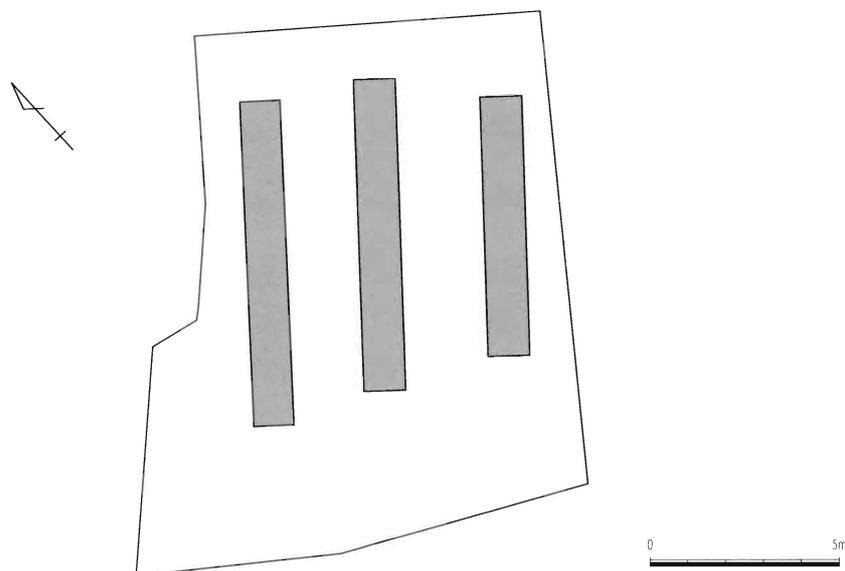
### 第2節 調査の方法と経過

平成23年9月12日 残土置場が確保できない為、調査区全体を2区に分割し、反転する計画で調査を実施することとする（第3図）。

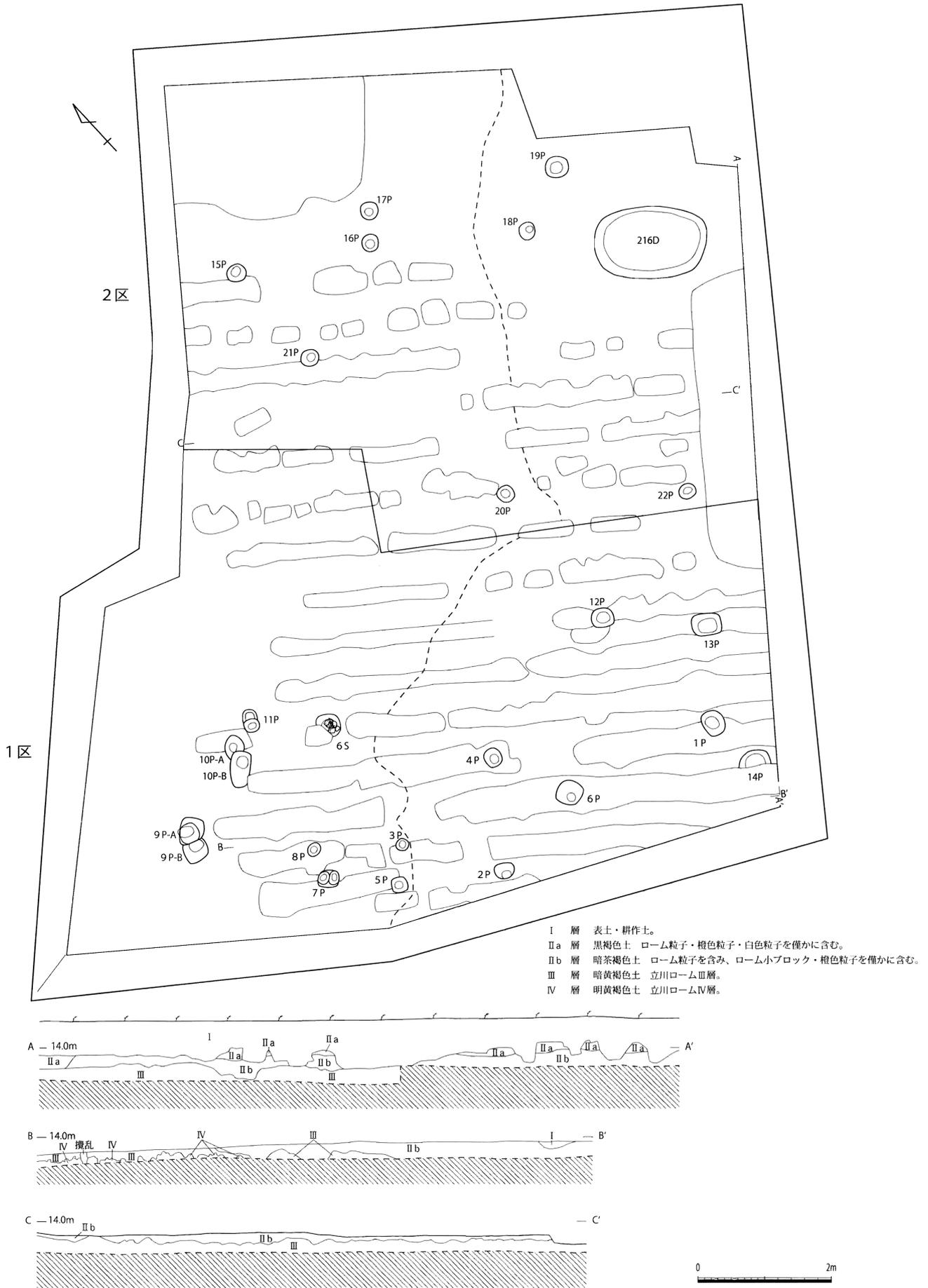
1区（南半）の表土剥ぎ作業を開始する。残土置場は2区（北半）とする。

9月13日 器材搬入等、調査区の整備を行う。遺構確認作業の結果、調査区東側に集石1基、ピット十数本を検出した。また調査区南側に、暗褐色ないし暗茶褐色を基調とする縄文時代早期後半の遺物包含層を確認する。調査区全体に、東西方向に延びる幅20cm程度の畝状耕作痕による攪乱を確認する。

- 畝状耕作痕による攪乱の除去を行う。攪乱下から新たにピット数基を確認する。
- 9月14日 引き続き、攪乱の除去を実施する。  
ピットの精査を開始する。
- 9月15日 ピットの完掘写真撮影、平板測量を実施する。  
遺物包含層の精査を開始した。縄文時代早期後半の住居跡である可能性を考慮しつつ、土器片及び石器、礫について全点ドットを実施することとする。
- 9月16日 引き続き包含層の精査を実施する。遺物出土状態の写真撮影、平板測量、取り上げを実施し、精査を終了する。また、調査区西壁南北方向に1区A—A'、調査区南側東西方向にB—B'を設定し、土層堆積状況の観察とセクション図の作成を実施する。  
6号集石(6S)の精査を開始した。セクションA—A'を設定し、掘り下げた。セクションの写真撮影及び図化を実施した後、完掘した。その後、完掘写真撮影、図化を実施し、精査を終了した。本日で1区の精査を終了する。
- 9月17日 1区の埋戻し作業を実施した。
- 9月20日 2区の表土剥ぎ作業を実施した。残土置場は1区とする。
- 9月22日 調査区の整備と遺構確認作業を実施した。その結果、土坑1基、ピット数基を確認した。また、1区同様、調査区東側を中心に暗褐色ないし暗茶褐色を基調する漸移層を確認した。調査区全体が畝状耕作痕の攪乱を受けていることを確認した。  
攪乱の除去を行った後、ピット及び土坑(216D)の精査を開始した。216Dは、南北・東西方向に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げた。
- 9月26日 引き続きピット及び216Dの精査を実施した。完掘写真撮影及び平板測量を実施した。
- 9月27日 漸移層の精査を開始した。また、調査区西壁南北方向に2区A—A'、調査区中央東西方向にC—C'を設定し、土層堆積状況の観察とセクション図の作成を実施する。  
本日で2区の精査を終了し、器材の搬出を行った。
- 9月28日 重機による埋戻し作業を行った。本日で発掘作業を終了する。



第3図 確認調査時のトレンチ設定図(1/200)



第4図 遺構分布図 (1 / 80)

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### (1) 概要

今回の調査では、1区遺構外から旧石器時代のホルンフェルス製のナイフ形石器が1点検出された。

田子山遺跡では現在までの調査で旧石器時代の遺物はほとんど確認されていないが、その存在が予測される資料となった。

#### (2) 遺構外出土遺物

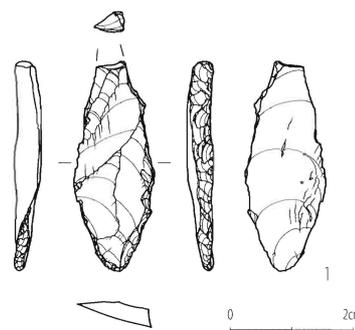
##### 遺物 (第5図)

1はホルンフェルス製のナイフ形石器で、旧石器時代の所産と考えられる。剥片を素材として、素材打面を基部に用いており、素材正面の剥離面構成は、主に右側縁基部方向からの剥離で構成されるが、規則性は認められない。素材の剥片形状は、右側縁の急角度連続剥離によって大きく変形していることが考えられ、不整形の剥片となる可能性が高い。

右側縁は全体に連続した急角度剥離による二次的剥離がなされ、素材のエッジは残らない。とくに先端側に向かっての二次的剥離は刃先角が最大77°と最も急角度になる(49°～77°)。二次的剥離の打点間距離は、2.58mm前後となるが、それぞれいくつかの剥離面で単位を形成してやや抉状の縁辺を作り、それぞれがきり合わない状況から、大きな鋸歯縁状の縁辺が成形されている。10mmあたりの剥離面枚数は4.28枚(15枚/35.075mm)となる。

左側縁は全体に大きく素材のフェザーエッジを残し(刃先角21°前後)、基部のみに微細な急角度剥離を連続している(刃先角72°前後)。打点間距離および10mmあたりの剥離面枚数は微細な剥離であるために計測不能である。

いわゆる「二側縁加工」のナイフ形石器で、先端は裏面から正面に向かって折れている。



第5図 遺構外出土遺物 (4 / 5)

### 第2節 縄文時代

#### (1) 概要

今回の調査では縄文時代早期前半と早期後半の遺物が検出された。

遺構としては、集石遺構が1基、ピットが5基検出され、早期前半の遺物包含層が調査区東側を中心に認められた。集石からは土器1点、石器1点、礫10点が検出された。包含層からの出土遺物は土器80点、石器9点、礫68点であり、合計157点であった。その他、遺構外、攪乱からの出土遺物は土器235点、石器5点であった。

## (2) 集石

## 6号集石

## 遺構 (第6図)

[位置] 1区中央西寄り

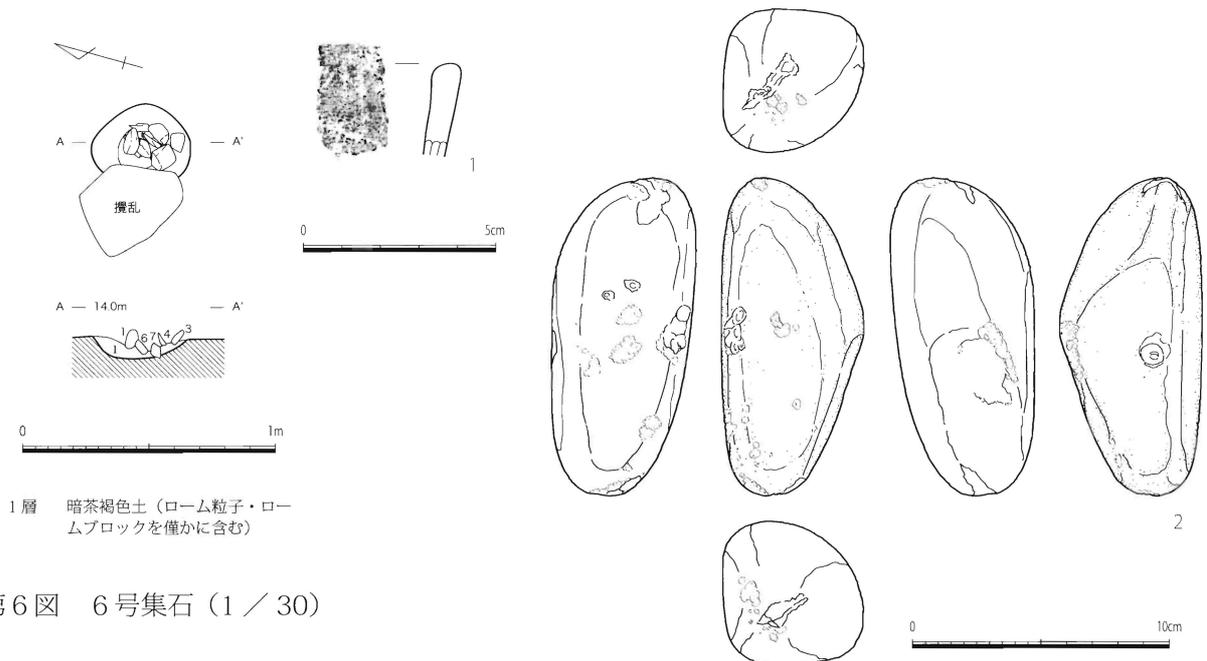
[構造] 平面形：不整形。規模：長軸 39 cm / 短軸不明 / 深さ 12 cm。長軸方位：N-15°-E。

[覆土] 1層。

[遺物] 土器1点、石器1点、礫11点。

[時期] 早期前半か。

[所見] 石器、礫とも赤化している。掘り込みは浅い。



1層 暗茶褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを備かに含む)

第6図 6号集石 (1 / 30)

第7図 6号集石出土遺物 (1 / 2・1 / 3)

## 遺物 (第7図)

[土器] 1は早期前半撚糸文系土器様式の第4様式にあたる稲荷台式の口縁部破片である。口縁部は平坦状で、内面に若干肥厚する。施文原体はL軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 12.9 mm からで、条間は 4.3 mm、原体圧痕幅が 0.8 mm である。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部はミガキ、内面は横ナデとなる。胎土には角礫状の石英が含まれる。

[石器] 2は安山岩製である。敲石類のうち、敲打痕（上下端）と多くの面に小型円錐状の凹みが複数で構成される。小型円錐状の凹みは裏面に1カ所、左側面に2カ所、正面と左側面との稜部に3カ所認められ、このうち裏面の凹みは比較的大きく、底面に線状の痕跡を持つ（9.06×8.49 mm、深さ 2.50 mm）。正面および左側面には部分的な敲打痕が認められ、右側面と裏面との稜部にはやや面的な敲打痕が認められるが、上下両端の敲打痕はいずれも貧弱な痕跡である。

[礫] 集石の礫は石器も赤化している点から、石器としての機能を失ってから集石の構成礫として用いられていると考えられ、石器を含めると12点で構成されている。石材構成は砂岩8点、ホルンフェルス2点、閃緑岩・安山岩各1点である。接合関係も認められ、それらを勘案すると9点で構成され

ている。接合後の重量は 94.3g ～ 672.3g で平均では 368.0g となり比較的大きな礫で構成されている点から、礫の供給源を特定する必要性がある。

### (3) 遺物包含層

遺物包含層は調査区の東側に漸移層部分が確認され（第 4・8 図破線部分東側）、その範囲からプライマリーな状態で土器 80 点、石器 9 点、礫 68 点検出された。

#### 遺 構（第 8 図）

[位 置] 調査区東側

[検出状況] 自然層Ⅱ b 層から出土しているが、東西方向に認められる耕作痕によって部分的に切られている。

[覆 土] 自然層Ⅱ b 層（漸移層）

[遺 物] 土器 80 点、石器 9 点、礫 68 点

[時 期] 早期前半～早期後半。

[所 見] 調査区西側ではⅡ b 層（漸移層）は認められなかった。

#### 遺 物（第 9～11 図）

[土 器]（第 9・10 図）

1～42 が早期前半撚糸文系土器様式の第 4 様式にあたる稲荷台式である。43 が第 5 様式のうちの稲荷原式、44～46 が第 5 様式のうちの平坂式である。47 は早期後半条痕文系土器である。

1 は口縁部破片で、回転縄文 RL を斜位に施文し、施文開始位置は口縁部下 2.5 mm である。無文部分をほとんど持たず、第 3 様式夏島式の名残を残すものである。口縁部は円頭状で外面にやや肥厚する。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位は横ナデとなる。胎土には角礫状の石英が含まれる。

2 は口縁部破片であり、形状は平坦状で外面に強く肥厚し、外削ぎ状の形状となる。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 3.8 mm からで、施文単位は 6 条 1 単位と思われる。単位幅は 12.0 mm、単位間隔は 2.6 mm、条間は 1.1 mm、原体圧痕幅が 1.1 mm である。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はナデとなる。胎土には粒径の大きな角礫状の石英と角閃石が特徴的に多く含まれる。

3 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 2.8 mm からで、施文単位は 5 条 1 単位と思われる。単位幅は 10.5 mm、単位間隔は 2.2～6.2 mm、条間は 1.7 mm、原体圧痕幅が 1.2 mm である。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はミガキ状と横ナデとなる。胎土には粒径の大きな角礫状の石英が特徴的に多く含まれる。

4 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 19.7 mm からで、施文単位・単位幅は小破片のため不明である。単位間隔は 3.7 mm、条間は 1.8 mm、原体圧痕幅が 1.0 mm である。器面調整は、外面がミガキで口縁部分はナデ、内面ナデとなる。胎土には粒径の小さな円礫状の石英が含まれる。

5 は口縁部破片であり、形状は外反する円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体は L 軸巻で条が縦



第8図 包含層遺物出土分布図 (1 / 100)

位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 2.4 mm からで、施文単位は 9 条 1 単位の可能性がある。単位幅は 18.5 mm、単位間隔は 3.5 mm、条間は 2.0 ～ 2.5 mm、原体圧痕幅が 1.5 mm である。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はナデとなる。胎土には粒径の小さな角礫状の石英が特徴的に含まれ、角閃石・長石が多く含まれる。

6 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面に強く肥厚する。施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 5.9 mm からで、施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 10 mm と思われる。単位間隔は 2.4 mm、条間は 2.4 mm、原体圧痕幅が 1.4 mm である。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はミガキ状とナデとなる。胎土には粒径の小さな角礫状の石英が特徴的に含まれ、角閃石・長石が多く含まれる。

7 は口縁部破片であり、形状は外反した尖頭状で内面にやや肥厚する。施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 1.0 mm からで、施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 5.8 ～ 6.0 mm、単位間隔は 2.0 ～ 8.0 mm、条間は 2.6 mm、原体圧痕幅が 1.4 mm である。器面調整は、外面が縦位のナデで口縁部分はミガキ、ナデとなる。胎土には粒径の大きな角礫状の石英が特徴的に多く含まれる。

8 は口縁部破片であり、形状は円頭状で肥厚は認められない。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 1.0 mm からで、施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 7.8 mm、単位間隔は 0 ～ 3.8 mm、条間は 2.8 mm、原体圧痕幅が 1.4 mm である。器面調整は、外面がミガキ状で口縁部分はナデ、内面はナデとなる。胎土には粒径の大きな円礫状の石英が含まれ、砂粒が特徴的に多く含まれる。

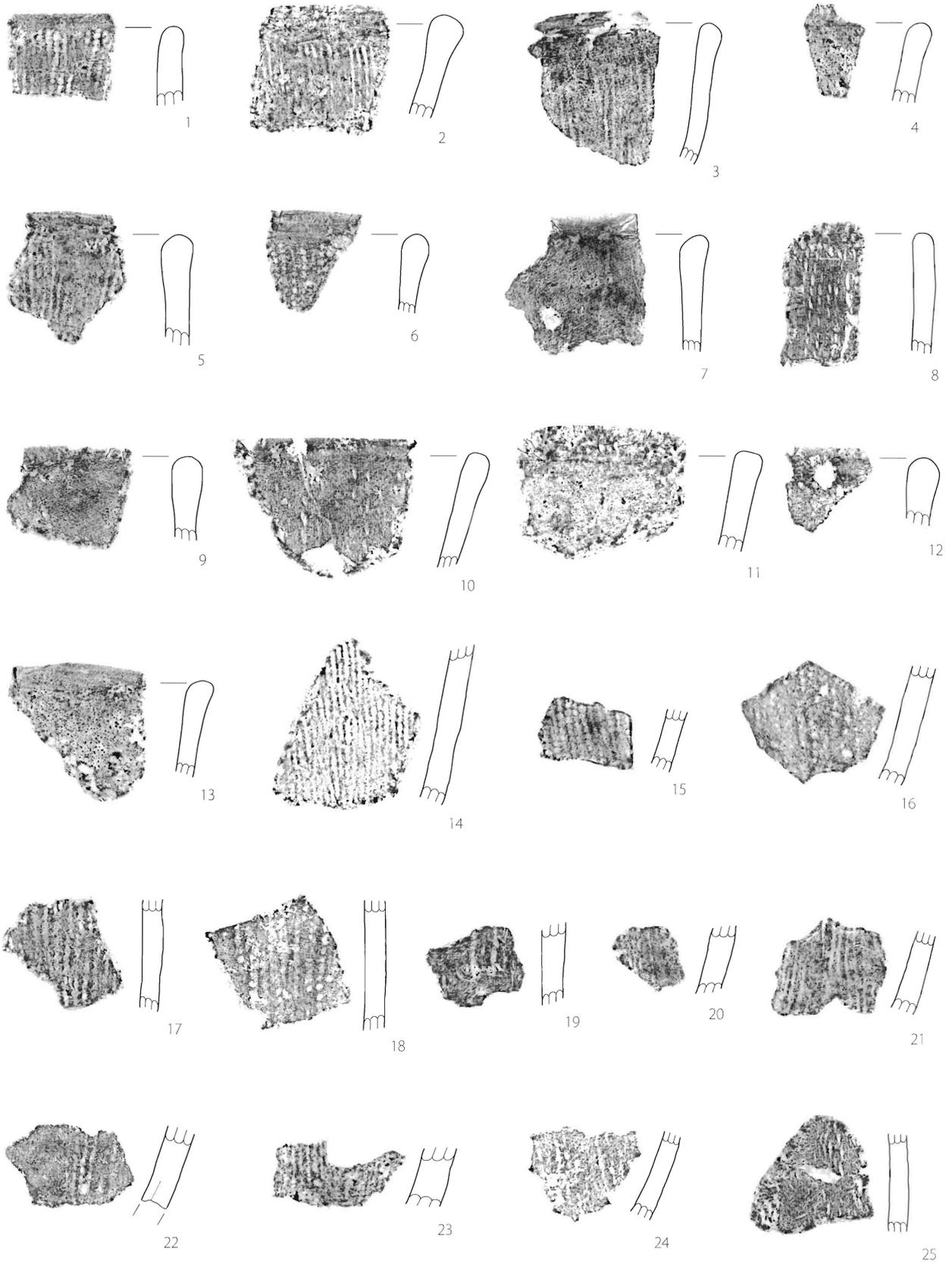
9 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 9.1 mm からで、施文単位は 5 条 1 単位と思われる。単位幅は 15.0 mm、単位間隔は 16.7 mm 以上、条間は 3.0 mm、原体圧痕幅が 1.9 mm である。器面調整は、外面が横ナデのちミガキで口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位は横ナデとなる。胎土には粒径の小さな角礫状の石英が含まれる。

10 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 6.2 mm からで、施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 9.4 mm、単位間隔は 4.2 mm、条間は 3.5 mm、原体圧痕幅が 1.7 mm である。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は横ミガキとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

11 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。無文で、器面調整は内外面ともナデ、指頭圧痕で口縁部分はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

12 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。無文で、器面調整は外面、口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキ、それより下位はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、長石、砂粒が含まれる。

13 は口縁部破片であり、形状は尖頭状で内面にやや肥厚する。無文で、器面調整は外面がナデで口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位は横ナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、角閃石、長石、砂粒が含まれる。



第9図 包含層出土遺物1 (1 / 2)

14 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文するものである。条間は 1.1 mm、原体圧痕幅が 1.4 mm である。器面調整は内面はナデとなる。胎土には円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒、礫が含まれる。

15 は胴部破片であり、回転縄文 RL を横位に施文するものである。条間は 2 mm、原体圧痕幅が 1.7 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

16 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文するものである。条間は 3.3 mm、原体圧痕幅が 1.7 mm である。器面調整は外面がナデ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

17 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文するものである。条間は 2.7 mm、原体圧痕幅が 1.9 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、角閃石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

18 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文するものである。条間は 3.3 mm、原体圧痕幅が 1.8 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

19 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文するものである。条間は 2.4 mm、原体圧痕幅が 1.6 mm である。器面調整は外面が縦ナデ、内面はナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

20 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 6 条 1 単位と思われる。単位幅は 10.5 mm、条間は 0.8 ～ 2.2 mm、原体圧痕幅が 0.9 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

21 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 5 条 1 単位と思われる。単位幅は 9.7 mm、単位間隔は 4.6 mm、条間は 0.8 ～ 1.8 mm、原体圧痕幅が 0.9 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、長石、砂粒が含まれる。

22 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 5 条 1 単位と思われる。単位幅は 10.1 mm、単位間隔は 3.7 mm、条間は 1.6 ～ 1.9 mm、原体圧痕幅が 1.1 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、長石、砂粒が含まれる。

23 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 9 条 1 単位と思われる。単位幅は 17.5 mm、単位間隔は 0 mm、条間は 1.1 ～ 2.3 mm、原体圧痕幅が 1.2 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、長石、砂粒が含まれる。

24 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 9.5 mm、単位間隔は 0 mm、条間は 1.6 mm、原体圧痕幅が 1.3 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

25 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 8 条 1 単

位と思われる。単位幅は 13.8 mm、単位間隔は 9 mm、条間は 1.7 mm、原体圧痕幅が 1.2 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

26 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 5 条 1 単位と思われる。単位幅は 11.1 mm、単位間隔は 0 mm、条間は 2 mm、原体圧痕幅が 0.8 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、砂粒が含まれる。

27 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 4.2 mm、単位間隔は 6.2 ~ 7.9 mm、条間は 2 mm、原体圧痕幅が 1.2 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英、長石、砂粒が含まれる。

28 は胴部破片であり、施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 8 mm、単位間隔は 0 mm、条間は 2.1 mm、原体圧痕幅が 1.9 mm である。器面調整は内面はナデである。胎土には長石が多量に、粒径の小さい角礫状の石英、斜方輝石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

29 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 9.5 mm、単位間隔は 7.4 mm、条間は 2.4 ~ 2.7 mm、原体圧痕幅が 1.8 mm である。器面調整は内外面ともミガキである。胎土には角礫状の石英が多量に、角閃石、長石、黒雲母が含まれる。

30 は胴部破片であり、施文原体は L (II 反撚り) 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 6.1 mm、単位間隔は 0 mm、条間は 2.5 mm、原体圧痕幅が 2.2 mm である。器面調整は内外面ともミガキ状でなる。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、砂粒が含まれる。

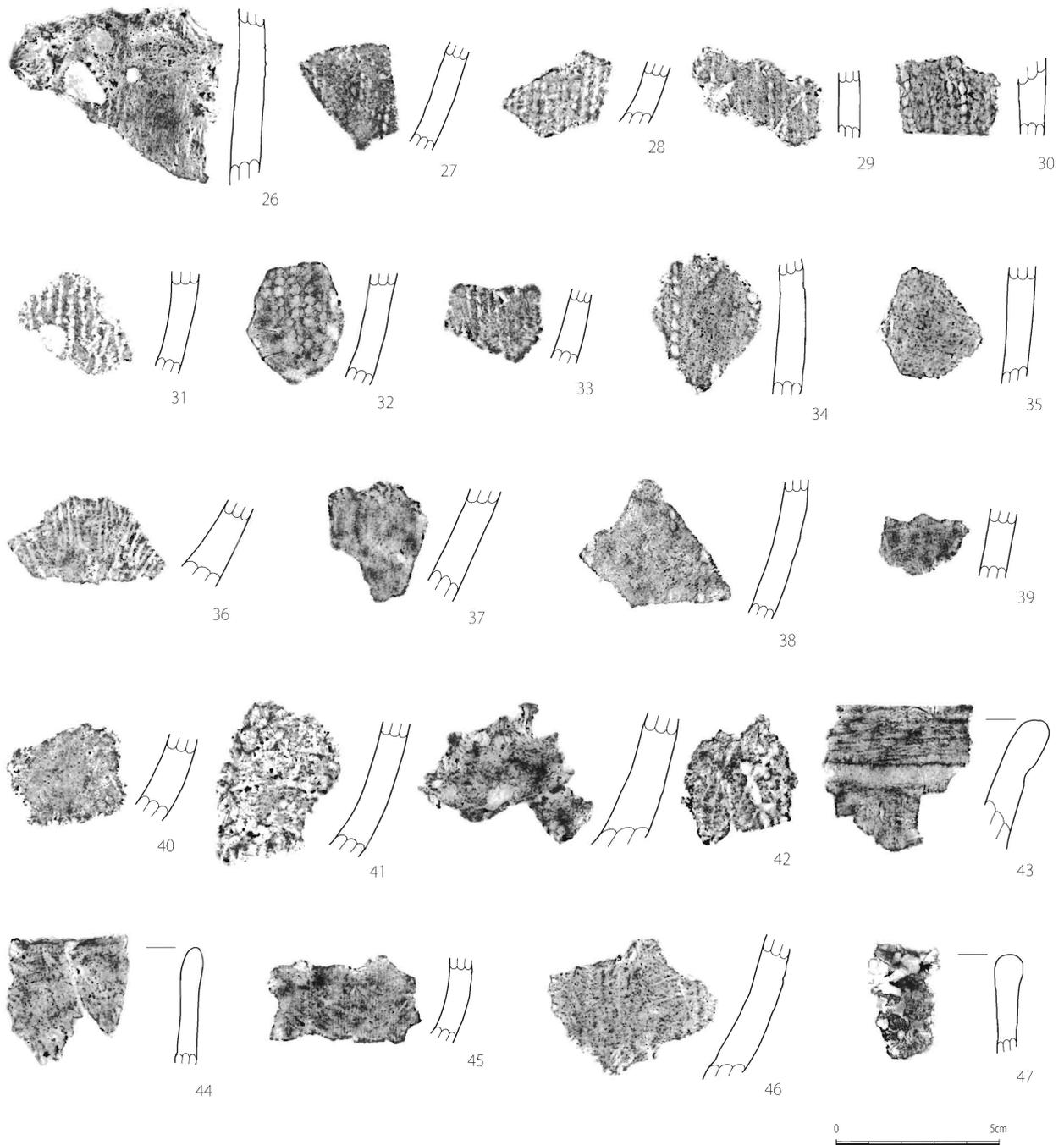
31 は胴下半部の破片で、施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 6.7 mm、単位間隔は 3 mm、条間は 2.5 mm、原体圧痕幅が 2 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面は縦ミガキとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

32 は胴部破片であり、施文原体は L (II 反撚り) 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 9 mm、条間は 2.5 mm、原体圧痕幅が 2.5 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

33 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 5 条 1 単位と思われる。単位幅は 11.8 mm、単位間隔は 4.6 mm、条間は 2.9 mm、原体圧痕幅が 0.9 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

34 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 19 mm、単位間隔は 3 mm、条間は 4.5 mm、原体圧痕幅が 2.8 mm である。器面調整は内外面ともナデである。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、砂粒が含まれる。

35 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。原体圧痕幅が 0.6 mm である。器面調整は外面が横ナデのちミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の



第10図 包含層出土遺物2 (1 / 2)

石英、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

36は胴下半部の底部付近の破片であり、施文原体はL軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は3条1単位と思われる。単位幅は5.4mm、単位間隔は0mm、条間は1.4mm、原体圧痕幅が0.7mmである。器面調整は内外面ともナデである。胎土には角礫状の石英、長石、黒雲母が含まれる。

37は胴部破片であり、無文である。器面調整は外面が縦ミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

38は胴部破片であり、無文である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径の

やや小さい円礫状の石英、長石、砂粒が含まれる。

39は胴部破片であり、無文である。器面調整は外面が縦位ナデ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

40は胴下半部の底部付近の破片で、無文である。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

41は胴下半部の底部付近の破片であり、無文である。器面調整は外面がナデ、同心円状圧痕、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英、長石が多量に、砂粒、褐色粒子が含まれる。

42は胴下半部の底部付近の破片であり、無文である。器面調整は内外面ともナデである。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

43は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下23.5mmからで、4条1単位と思われる。単位幅は8.8mm、条間は2.6～3.3mm、原体圧痕幅が2.1mmである。器面調整は外面が横ナデで口縁部分はミガキ、内面は横ナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、長石が多量に、砂粒、褐色粒子が含まれる。

44は口縁部破片であり、形状は尖頭状である。無文で、器面調整は外面が横位ケズリ、横ナデで口縁部分はナデ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

45は胴部破片であり、器面調整は外面が斜位ケズリ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

46は胴部破片であり、器面調整は外面が斜位ケズリ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石と長石が多量に、砂粒が含まれる。

47は早期後半条痕文系土器の口縁部破片であり、形状は円頭状で均等やや肥厚する。無文で、器面調整は内外面とも横ナデで口縁部分はナデとなる。胎土には円礫状の角閃石、長石、繊維状痕跡、褐色粒子が含まれる。

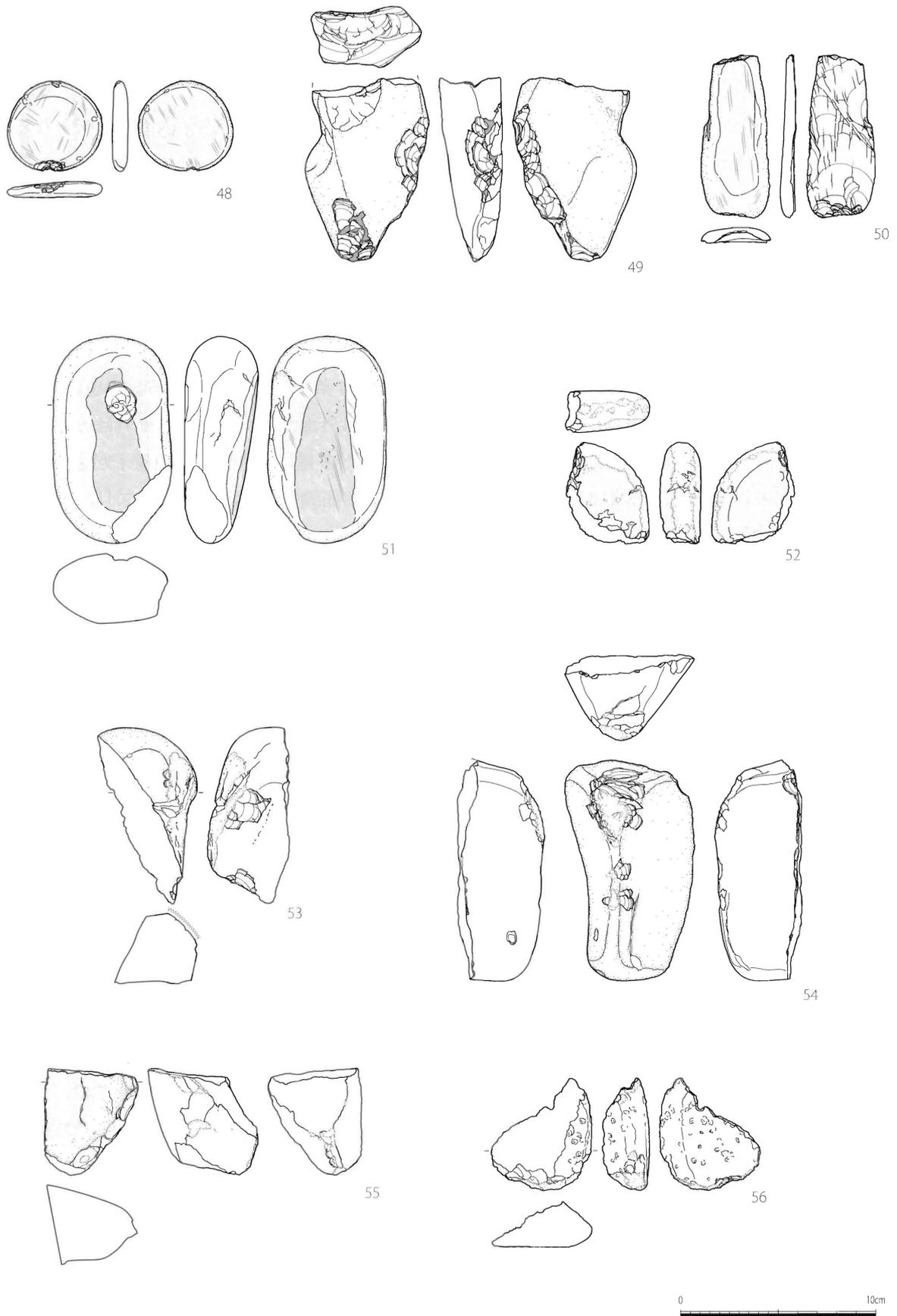
#### [石 器] (第11図)

48は安山岩製の石錘である。小型薄手の扁平礫あるいは扁平に成形した礫片を素材とし、剥離を伴う敲打によって上下端に凹部を作り出している。これらは両極敲打によるものと考えられ、上面の剥離が小さく、下面の剥離が大きく生じている。正面、裏面ともに縁辺をのぞく大部分が磨痕で覆われる。

49はホルンフェルス製の二次的剥離のある礫である。右側縁には表裏の交互剥離が認められ、これによる刃先角は68～79°となる。左側縁は折れ面との境で礫面の稜頂部に細い敲打が認められており、上面は裏面から正面に向かって折れているが、この下縁に縁辺稜敲打が認められる。下面は裏面方向への剥離で打面を形成し、正面方向に連続した剥離を加えている。この部位の刃先角は74°となる。

50は粘板岩製の二次的剥離のある剥片である。正面の原礫面上には素材剥離前の石製品の磨痕と考えられる浅い磨面が認められる。裏面はいくつかの割れ円錐が左右側縁に認められ、素材剥離前に側面方向からの打撃が加わったものと考えられる。下面は主に裏面方向に顕著に不規則な剥離痕が認められ、正面側には微細な不規則・非連続剥離が生じている。縁辺は直線的で台石に接している状態での剥離であると考えられる。上面は裏面から正面方向への折れと碎けによって構成され、上下の様態は両極剥離によって生じた可能性が考えられる。

51は砂岩製の磨石類のうち、磨面（正裏面）とこれを切る円錐状の凹み（正面）、磨面に切られる



第11図 包含層出土遺物3 (1 / 3)

面的敲打痕（裏面）で構成される。このことから面的敲打→磨面→円錐状の凹みの推移がうかがえる。円錐状の凹みは、長さ 20.76 mm、幅 15.72 mm、深さ 3.62 mm となり、円錐の底面はやや線状となるが、全体的に荒れていて不明瞭である。磨面は中央で顕著で、その周囲に弱く形成され、特に中央部は磨面が平坦に近い形をとる。右側面の一部は被熱により弾けている。

52 は閃緑岩製の磨石類で、表裏両面の磨面と周縁の敲打痕で構成される。磨面は両面とも縁辺部のぞくほぼ全面に及び、緩い湾曲を示す。敲打は残存部位から上面から右側面にかけてのみ認められるが、幅 7.91 ～ 11.64 mm と 10 mm 前後でほぼ安定している。おそらく全周にわたってこの敲打痕が巡ると考えられ、敲打痕はやや穏やかな状態の部分が多いが、部分的に痘痕状となる部位も認められる。

53 は砂岩製である。敲石類のうち、礫面の稜頂部への面的敲打痕で構成される、いわゆる特殊磨石である。面的敲打痕の大きさは、長さ 62.23 mm（残存部位）、幅最大 21.42 mm、安定部幅 12.78 mm となる。この敲打痕は細かな剥離を伴うものの 9 の面的敲打痕跡に比べてやや穏やかな敲打痕である。

54 は砂岩製である。敲石類のうち、礫面の稜頂部への面的敲打痕と破砕面の縁辺稜の線状敲打痕で構成される。礫面の稜頂部の面的敲打痕は 3 カ所にわかれ、いずれも剥離を伴う粗い敲打痕であり、一番広い敲打痕は長さ 25.74 mm、幅 15.51 mm をはかり、礫の形状変換点に位置する。他の 2 カ所は長さ 5.62 mm、幅 5.24 mm、長さ 11.19 mm、幅 5.44 mm と限定的な痕跡が点在している。破砕面の縁辺稜の線状敲打痕は、左右側縁、上部縁辺に認められる。右側縁に認められる痕跡は最も顕著で、少なくとも上部から 72.59 mm の範囲では連続した痕跡が残されている。これ以外の場所においても散漫な痕跡が残され、左側縁、上部縁辺の痕跡は非常に散漫である。

55 は閃緑岩製の敲石類で、磨面と敲打痕で構成される。磨面は湾曲面となり、元の磨石の磨面と考えられ、敲打痕は右側縁に沿った部位と破砕面の一部の突起先端に認められるが、いずれも比較的穏やかな敲打痕である。

56 は多孔質安山岩製の敲打痕のある礫である。破砕面以外の湾曲のありかたなどから、石皿の破片に対して敲打が加えられたものであると考えられる。石材の特徴から敲打痕と破砕の前後関係は不明瞭で、敲打痕が石皿整形時のものなのか破砕後の敲きなのかは判別できない。

#### (4) ピット

##### 3号ピット

遺 構 (第 12 図)

[位 置] 1 区中央南西寄り

[構 造] 平面形：不整円形。規模：長軸 19 cm / 短軸 17 cm / 深さ 39 cm。長軸方位：N-31°-W。

[覆 土] 1 層。

[遺 物] 出土しなかった。

##### 17号ピット

遺 構 (第 12 図)

[位 置] 2 区中央北西寄り

[構 造] 平面形：円形。規模：径 28 cm / 深さ 25 cm。長軸方位：N-89°-W。



第12図 3・17・20・21・22号ピット (1/30)

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

### 20号ピット

**遺 構** (第12図)

[位 置] 2区南西端

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 26 cm / 短軸 24 cm / 深さ 37 cm。長軸方位：N-5°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 土器が2点出土している。

### 21号ピット

**遺 構** (第12図)

[位 置] 2区北西側やや南寄り

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 27 cm / 短軸 25 cm / 深さ 27 cm。長軸方位：N-53°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 土器が2点、礫が1点出土している。

### 22号ピット

**遺 構** (第12図)

[位 置] 2区南東隅

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 26 cm / 短軸 23 cm / 深さ 29 cm。長軸方位：N-69°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

## (5) 遺構外出土遺物

[土 器] (第13・14図)

1が早期前半撚糸文系土器様式の第2様式にあたる井草式、2～38が第4様式にあたる稲荷台式である。39は早期後半条痕文系土器である。

1は口縁部破片であり、口縁部は外反し、肥厚する。口縁端面・内面に回転縄文 RL を横位に施文する。外面には回転縄文 RL を縦位に施文し、施文開始位置は口縁下 7.0 mm からで、条間は 2 mm、原体圧



第13図 遺構外出土遺物1 (1 / 2)

痕幅が3.2 mmである。器面調整は外面が口縁外反下指頭圧痕で口縁部はRL横位回転、内面はナデとなる。胎土には長石が多量に、小さい角礫状の石英、斜方輝石、砂粒が含まれる。

2は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚し、外削ぎの形状となる。回転縄文RLを斜位に施文し、施文開始位置は口縁下1.5 mmからで、条間は3.0～3.5 mm、原体圧痕幅が2.1 mmである。器面調整は外面、口縁部分はナデ、内面は上端部がミガキで、それより下位はナデとなる。胎土にはやや小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

3は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。回転縄文LRを斜位に施文し、施文開始位置は口縁下3.0 mmからで、条間は2.5 mm、原体圧痕幅が2 mmである。器面調整は内外面がナデで口縁部分はミガキとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、角閃石、長石、砂粒、黒雲母が含まれる。

4は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面に強く肥厚する。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下6.8 mmからで、施文単位は7条1単位と思われる。単位幅は12.6 mm、単位間隔は3 mm、条間は1.5～2.5 mm、原体圧痕幅が0.6 mmである。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、斜方輝石、長石が含まれる。

5は口縁部破片であり、形状は尖頭状で内面にやや肥厚し、外削ぎの形状となる。施文原体はL軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下5.7 mmからで、施文単位は3条1単位と思われる。単位幅は3.4 mm、条間は1.8 mm、原体圧痕幅が1.4 mmである。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面はミガキとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、褐色粒子が含まれる。

6は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面に強く肥厚する。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下10.5 mmからで、施文単位は4条1単位と思われる。単位幅は9 mm、単位間隔は5.5 mm、条間は2 mm、原体圧痕幅が1.3 mmである。器面調整は外面、口縁部分はミガキ、内面は上端部ミガキとなる。胎土には小さい円礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

7は口縁部破片であり、形状は平坦状で外面にやや肥厚する。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下1.0 mmからで、施文単位は4条1単位と思われる。単位幅は3.4 mm、単位間隔は3.5 mm、条間は2.0～2.5 mm、原体圧痕幅が1.8 mmである。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面はミガキとなる。胎土には小さい円礫状の石英、長石、砂粒、礫が含まれる。

8は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下7.5 mmからで、施文単位は5条1単位と思われる。単位幅は10.6 mm、単位間隔は6 mm、条間は2.0～3.0 mm、原体圧痕幅が1.1 mmである。器面調整は外面が横ナデ・ミガキで口縁部分はミガキ、内面は剥落している。胎土にはやや小さい角礫状の石英が多量に、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

9は口縁部破片であり、形状は平坦状で外面にやや肥厚する。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下2.5 mmからで、施文単位は3条1単位と思われる。単位幅は6.5 mm、単位間隔は12.0 mm、条間は2.0～3.0 mm、原体圧痕幅が0.3 mmである。器面調整は内外面、口縁部分ともミガキ状となる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

10は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚し、外削ぎの形状となる。施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下4.7 mmからで、施文単位は5条1単位

と思われる。単位幅は 11.3 mm、単位間隔は 0 mm、条間は 2.5 ~ 3.5 mm、原体圧痕幅が 1.9 mm である。器面調整は外面が横ナデ・ミガキ状で口縁部分はミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

11 は口縁部破片であり、形状は U 字状である。施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 3.0 mm からで、施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 9.1 mm、単位間隔は 4 mm、条間は 3 mm、原体圧痕幅が 1.5 mm である。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英と長石が多量に、角閃石、砂粒が含まれる。

12 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面に強く肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 22.5 mm からで、施文単位は 6 条 1 単位と思われる。単位幅は 15.5 mm、単位間隔は 12 mm、条間は 3 mm、原体圧痕幅が 1.9 mm である。器面調整は外面がナデで口縁部分はミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英が多量に、角閃石、長石、砂粒、礫、片岩が含まれる。

13 は口縁部破片であり、形状は平坦状で内面にやや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 7.6 mm からで、条間は 3 mm、原体圧痕幅が 1.4 mm である。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面はミガキとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、長石、褐色粒子が含まれる。

14 は口縁部破片であり、形状は平坦状で外面にやや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 10.0 mm からで、施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 5.4 mm、単位間隔は 12.5 mm、条間は 3.0 ~ 4.0 mm、原体圧痕幅が 2.8 mm である。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい石英が多量に、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

15 は口縁部破片であり、形状は円頭状で均等やや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 1.5 mm からで、施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 8 mm、条間は 5 mm、原体圧痕幅が 1.2 mm である。器面調整は外面、口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、長石が含まれる。

16 は口縁部破片であり、形状は平坦状である。施文原体は L 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 12.2 mm からで、施文単位は 3 条 1 単位と思われる。単位幅は 11.1 mm、単位間隔は 5.0 ~ 7.0 mm、条間は 5.0 ~ 7.0 mm、原体圧痕幅が 2 mm である。器面調整は外面が横ナデ・ミガキで口縁部分はミガキ、内面はミガキとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

17 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文開始位置は口縁下 4.0 mm からで、原体圧痕幅が 0.9 mm である。器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はミガキ、内面は指頭押圧となる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、長石が含まれる。

18 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面に強く肥厚する。無文で、器面調整は外面が剥落が多く、口縁部分はミガキ、内面は横位ミガキとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

19 は口縁部破片であり、形状は平坦状で外面に強く肥厚する。無文で、器面調整は内外面、口縁部分ともミガキとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

20 は口縁部破片であり、形状は尖頭状で内削ぎの形状となる。無文で、器面調整は外面が横ナデで口縁部分はミガキ、内面は横ナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

21 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。無文で、器面調整は外面が横ミガキで口縁部分はミガキ、内面は横ナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

22 は口縁部破片であり、形状は円頭状で内面にやや肥厚する。無文で、器面調整は外面が横ミガキで口縁部分はミガキ、内面はミガキとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

23 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面にやや肥厚する。無文で、器面調整は外面がミガキ状で口縁部分はナデ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい角礫状の石英、角閃石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

24 は口縁部破片であり、形状は尖頭状で外面にやや肥厚し、外削ぎの形状となる。無文で、器面調整は外面、口縁部分はミガキ、内面は上端部がミガキで、それより下位はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒が含まれる。

25 は口縁部破片であり、形状は円頭状で外面に強く肥厚し、外削ぎの形状となる。無文で、器面調整は外面が横ナデで口縁部分はミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒が含まれる。

26 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文し、条間は 2.1 mm、原体圧痕幅が 2.9 mm である。器面調整は内面はナデである。胎土には粒径の小さい円礫状の長石、砂粒が含まれる。

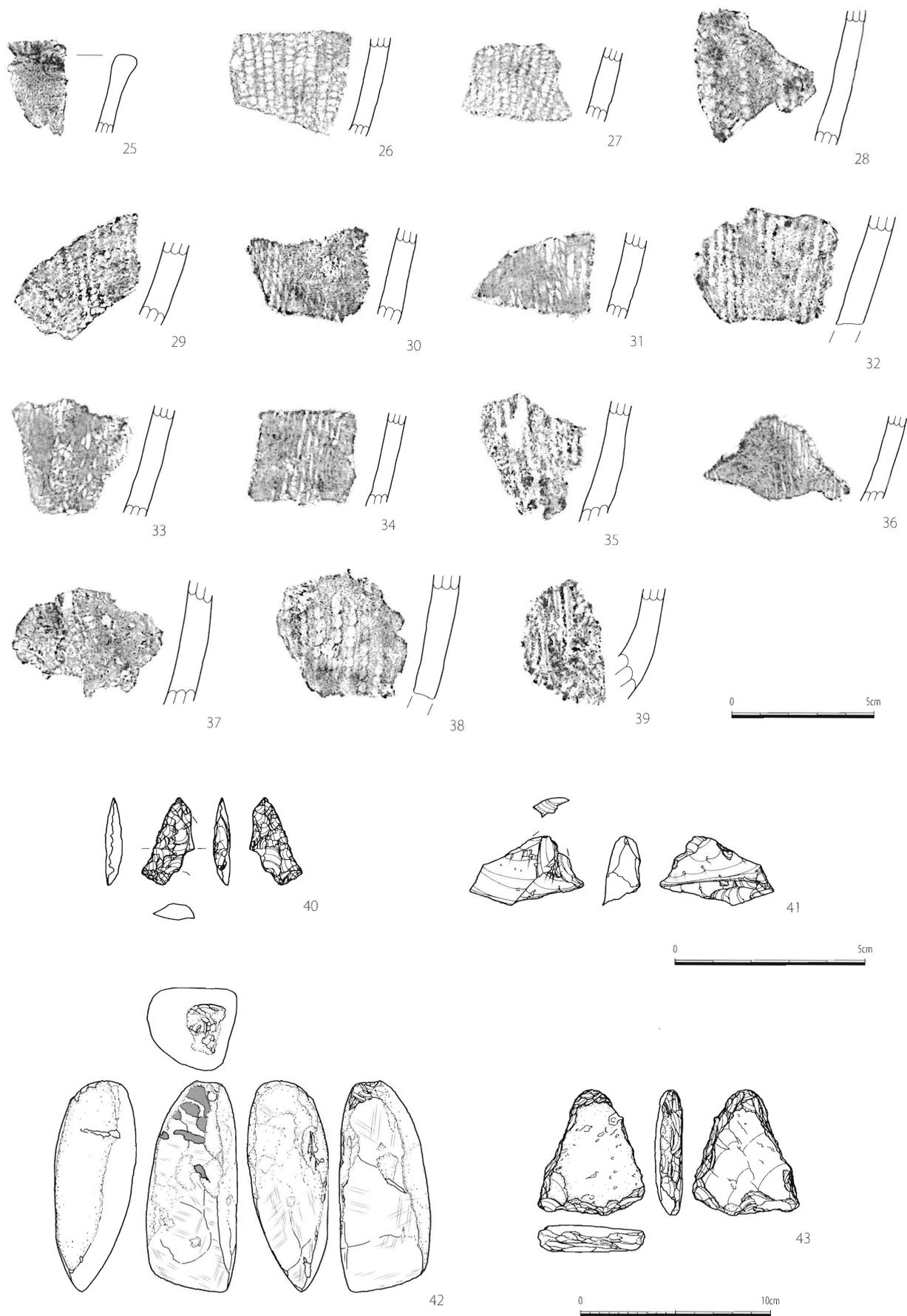
27 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文し、原体圧痕幅は 1.5 mm である。器面調整は内面はナデである。胎土には円礫状の長石が多量に、砂粒、褐色粒子が含まれる。

28 は胴部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文し、条間は 5.1 mm、原体圧痕幅が 3.2 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい円礫状の石英、角閃石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

29 は胴下半部破片であり、回転縄文 RL を斜位に施文し、条間は 2 mm、原体圧痕幅が 2 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英、角閃石、長石、褐色粒子が含まれる。

30 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 6 条 1 単位と思われる。単位幅は 11.7 mm、単位間隔は 3.5 mm、条間は 2 mm、原体圧痕幅が 1.1 mm である。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、斜方輝石、長石が含まれる。

31 は胴部破片であり、施文原体は R 軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は 4 条 1 単位と思われる。単位幅は 8.1 mm、単位間隔は 4.8 mm、条間は 2.0 ~ 2.8 mm、原体圧痕幅が 1.7 mm である。器面調整は外面がミガキ、内面は縦ミガキとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。



第14図 遺構外出土遺物2 (1 / 2・2 / 3・1 / 3)

32は胴部破片であり、施文原体はL軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は4条1単位と思われる。単位幅は9.6mm、単位間隔は4.9mm、条間は2.2mm、原体圧痕幅が1.6mmである。器面調整は内外面ともナデである。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、長石、砂粒が多量に含まれる。

33は胴部破片であり、施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は4条1単位と思われる。単位幅は14.7mm、単位間隔は3.9mm、条間は2.2～3.7mm、原体圧痕幅が1.5mmである。器面調整は内外面ともミガキ状である。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、褐色粒子が含まれる。

34は胴部破片であり、施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は8条1単位と思われる。単位幅は20.2mm、条間は2.5mm、原体圧痕幅が1.7mmである。器面調整は外面がミガキ状・横ナデ、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

35は胴部下半破片であり、施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は4条1単位と思われる。単位幅は10.3mm、単位間隔は0mm、条間は2.5mm、原体圧痕幅が1.1mmである。器面調整は内外面ともナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、長石が含まれる。

36は胴部破片であり、施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は6条1単位と思われる。単位幅は14.3mm、単位間隔は9.2～16.5mm、条間は2.6mm、原体圧痕幅が1.2mmである。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の石英、斜方輝石、長石、砂粒、褐色粒子が含まれる。

37は胴部破片であり、施文原体はR軸巻で条が縦位になるように施文される。施文単位は4条1単位と思われる。単位幅は11.5mm、単位間隔は13.4mm、条間は2.7mm、原体圧痕幅が0.8mmである。器面調整は外面がミガキ状、内面はナデとなる。胎土には角礫状の石英が多量に、長石、褐色粒子が含まれる。

38は胴部破片であり、施文原体はL(II反撚り)軸巻で条が縦位に施文される。条間は4.0mm、原体圧痕幅が3.0mmである。器面調整は外面がミガキ、内面はナデとなる。胎土には粒径のやや小さい角礫状の石英が多量に、斜方輝石、長石が含まれる。

39は胴部下半底部付近破片であり、貝殻背面を使って縦位に施文される。単位間隔は5.5mm、条間は1.3mmである。器面調整は外面が貝殻条痕、内面はナデとなる。胎土には粒径の小さい円礫状の長石、砂粒、繊維状痕跡が含まれる。

[石器] (第14図)

40は黒曜石製の石鏃で、縄文時代の所産と考えられる。二次的剥離は表裏両面ともに器体奥に及ぶため、素材を推し量ることは難しいが、折れの及ばない左側縁の稜線位置から、剥片が素材となっていると考えられる。二次的剥離の剥離順は、大きく見て左側縁裏(右下→左上)・右側縁表(右下→左上)、左側縁表(右上→左下)・右側縁裏(右上→左下)、脚部裏(右上→左下)、脚部表(右下→左上)、基凹部表(右上→左下)、基凹部裏(左上→右下)となっている(※「・」は並行関係、「、」は前後関係を示す)。刃先角は、左側縁で48°、脚部で56°、基凹部で53°となり、右側縁の刃先角は端部に過ぎるため、計測不能とした(刃先角が他よりも浅い)。打点間距離は安定しないが、左側縁で凡そ2.28mm前後、10mmあたりの剥離面枚数は左側縁で3.86枚(8枚/20.69mm)となる。右側縁と基凹部の打点間距離と10mmあたりの剥離面枚数は残存部位が少ないために計測不能とし、脚部の打点間距離と10mmあたりの剥離面枚数も、微細な二次的剥離で構成されるため計測不能とした。やや剥離枚数が少

ないものの、全体形状の完成度から完成品であったと考えられる。右半の大部分は正面から裏面に向かって折れている。

41は黒曜石製の不規則剥離のある剥片で、縄文時代の所産と考えられる。素材は不整形の剥片で、左右側縁にフェザーエッジをのこし、フェザーエッジの刃先角は、右側縁で $50^\circ$ 、左側縁で $52^\circ$ と似たような値を示す。不規則剥離は右側縁で部分的に、左側縁で単発的に生じており、頻繁な不規則剥離は認められない。末端はウートラパセとなり、石核の底面を大きく取り込んでいる。素材打面は裏面から正面方向に向かって折れている。

42は変質安山岩製の磨製石斧で、弥生時代の所産と考えられる。石材は、基質・鉱物（紫蘇輝石あるいは角閃石）から安山岩とみられるものの、基質・鉱物ともにやや緑色に変色していることから、変質安山岩としている。元は左側にさらに大きく広がる扁平片刃の磨製石斧であったと考えられる。右側面の凹凸から表→裏方向の折れによって欠損し、その後折れ面を研磨、一部を敲打によって整形したものとみられ、この部位は痘痕状とならない細かな敲打痕である。左側面はすべて敲打痕で構成され、この部位は上下の縁辺、基部方向で痘痕状のやや粗い敲打痕が認められるものの、ほとんどの部位で細かな敲打痕となる。先後関係は痘痕状→細かな敲打痕と考えられる。正面および裏面は、旧扁平片刃の表面の研磨痕であると考えられるが、部分的にやや細かな敲打痕が乗っており、側面との境界部は、角を除去するようにやや粗い痘痕状の敲打痕が認められる。上面は剥離を伴う非常に粗い敲打痕のみで構成され、刃部は元の扁平片刃の刃部をそのまま用いている。

43は結晶片岩製の敲打痕および二次的剥離のある剥片で、素材は正面全体に原礫面を残す。上下端は浅い角度の剥離を伴う敲打痕、左右側縁は非常に急角度の剥離を伴う敲打痕で構成されている。上下端のパティナは比較的古く、左右側縁のパティナは比較的新しい。

---

## 第3節 中世以降

---

### (1) 土 坑

#### 216号土坑

**遺 構** (第15図)

[位 置] 2区東端付近

[構 造] 平面形：長楕円形。規模：長軸170cm／短軸110cm／深さ16cm。長軸方位：N-41°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

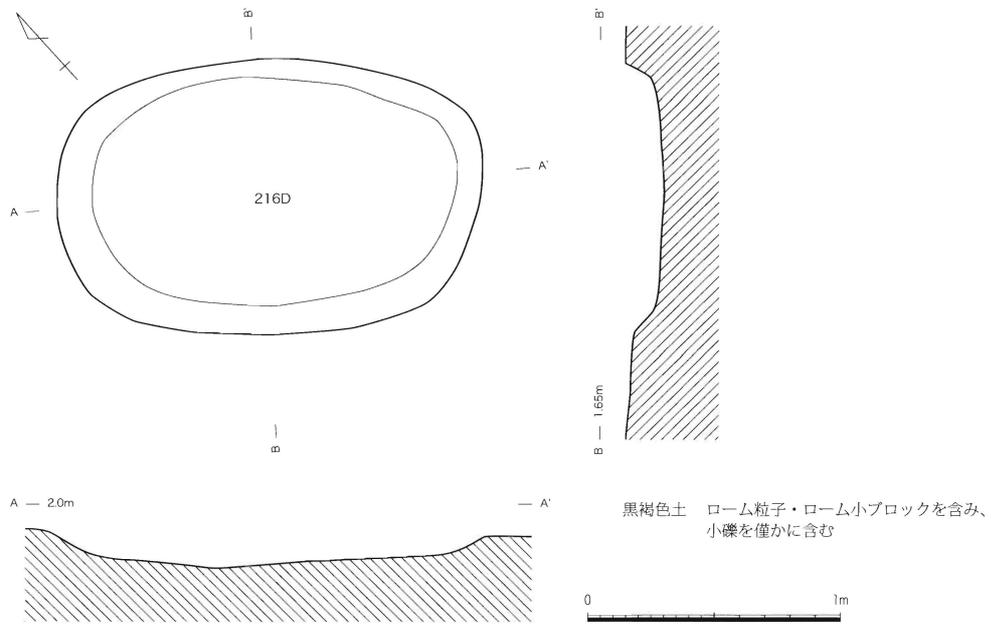
### (2) ピット

#### 12号ピット

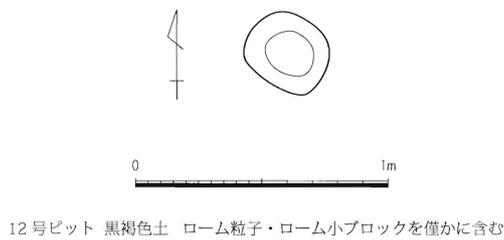
**遺 構** (第16図)

[位 置] 1区北東側

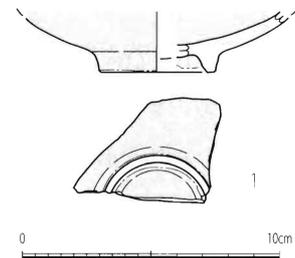
[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸34cm／短軸29cm／深さ33cm。長軸方位：N-53°-W。



第15図 216号土坑 (1 / 30)



第16図 12号ピット (1 / 30)



第17図 12号ピット出土遺物 (1 / 3)

[覆 土] 1層。

[遺 物] 磁器が1点出土している。

**遺 物** (第17図)

1は青磁の小皿と思われる

## 第4節 時期不明

### (1) ピット

#### 1号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南東側

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 38 cm / 短軸 34 cm / 深さ 32 cm。長軸方位：N-25°-E。

[覆 土] 1層。

[遺物] 出土しなかった。

2号ピット

**遺構** (第18図)

[位置] 1区中央南西寄り

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸 30 cm / 短軸 24 cm / 深さ 37 cm。長軸方位：N-56°-W。

[覆土] 1層。

[遺物] 出土しなかった。

4号ピット

**遺構** (第18図)

[位置] 1区中央

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 28 cm / 短軸 26 cm / 深さ 17 cm。長軸方位：N-12°-E。

[覆土] 1層。

[遺物] 出土しなかった。

5号ピット

**遺構** (第18図)

[位置] 1区中央南西寄り

[構造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 24 cm / 短軸 24 cm / 深さ 13 cm。長軸方位：N-27°-E。

[覆土] 1層。

[遺物] 出土しなかった。

6号ピット

**遺構** (第18図)

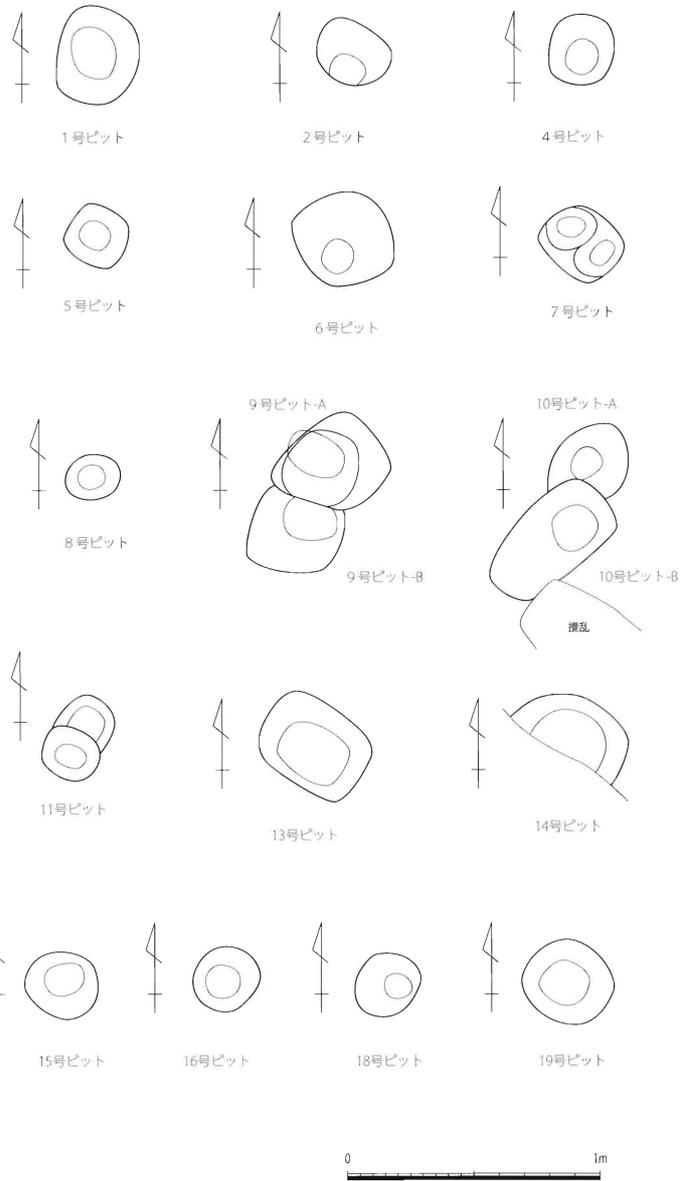
[位置] 1区中央南寄り

[構造] 平面形：不整円形。規模：長軸 43 cm / 短軸 38 cm / 深さ 75 cm。

長軸方位：N-67°-W。

[覆土] 1層。

[遺物] 出土しなかった。



- |          |       |                                   |
|----------|-------|-----------------------------------|
| 1号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む              |
| 2号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを含む                 |
| 4号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む              |
| 5号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを含む                 |
| 6号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む              |
| 7号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む              |
| 8号ピット    | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む             |
| 9号ピット-A  | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを含む                 |
| 9号ピット-B  | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む             |
| 10号ピット-A | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを含む                 |
| 10号ピット-B | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを含む                 |
| 11号ピット   | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを含む                 |
| 13号ピット   | 黒褐色土  | ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む、ローム小ブロックを含む      |
| 14号ピット   | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む              |
| 15号ピット   | 黒褐色土  | ローム粒子をやや多く、ローム小ブロックを含む (16P と似る)  |
| 16号ピット   | 黒褐色土  | ローム粒子を含み、ローム小ブロックを僅かに含む (15P と似る) |
| 18号ピット   | 黒褐色土  | ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む              |
| 19号ピット   | 暗茶褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロックを含む (板状礫出土)         |

第18図 時期不明ピット (1 / 30)

### 7号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区中央南西寄り

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 32 cm / 短軸 26 cm / 深さ 46 cm。長軸方位：N-46°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 内部が南東、北西に分かれて深くなっている。

### 8号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区中央南西寄り

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 22 cm / 短軸 18 cm / 深さ 39 cm。長軸方位：N-68°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

### 9号ピット - A

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南西側

[構 造] 平面形：不整形。規模：長軸 43 cm / 短軸 36 cm / 深さ 86 cm。長軸方位：N-50°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 9号ピット -Bを切り、中位に段がある。

### 9号ピット - B

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南西側

[構 造] 平面形：不整形。規模：長軸 36 cm / 短軸 32 cm / 深さ 52 cm。長軸方位：N-71°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 9号ピット -Aに切られる。

### 10号ピット -A

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南西側

[構 造] 平面形：不整形。規模：長軸 37 cm / 短軸 29 cm / 深さ 39 cm。長軸方位：N-38°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 10号ピット-Bに切られる。

### 10号ピット-B

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南西側

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸 55 cm／短軸 30 cm／深さ 56 cm。長軸方位：N-47°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 10号ピット-Aを切る。

### 11号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南西側

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 34 cm／短軸 24 cm／深さ 18 cm。長軸方位：N-36°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 南西側が深くなっている。

### 13号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南東側やや北寄り

[構 造] 平面形：隅丸長方形。規模：長軸 44 cm／短軸 34 cm／深さ 38 cm。長軸方位：N-54°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

### 14号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 1区南東側

[構 造] 平面形：不整円形か。規模：長軸 49 cm／短軸 24 cm／深さ 23 cm。長軸方位：N-56°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

[所 見] 南西半分を攪乱に切られる。

### 15号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 2区北西側

[構 造] 平面形：不整円形。規模：長軸 29 cm／短軸 27 cm／深さ 26 cm。長軸方位：N-44°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

### 16号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 2区中央北西寄り

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 27 cm / 短軸 24 cm / 深さ 28 cm。長軸方位：N-44°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

### 18号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 2区北東側

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 27 cm / 短軸 24 cm / 深さ 36 cm。長軸方位：N-42°-E。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

### 19号ピット

**遺 構** (第18図)

[位 置] 2区中央北東寄り

[構 造] 平面形：隅丸方形。規模：長軸 35 cm / 短軸 32 cm / 深さ 13 cm。長軸方位：N-46°-W。

[覆 土] 1層。

[遺 物] 出土しなかった。

## 第4章 調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代早期前半の包含層と集石1基が検出され、撚糸文系土器様式のうち第2様式の井草式から始まり第4様式の稲荷台式を中心として第5様式の稲荷原・平坂式が僅かながらも検出された。石器類は敲石、石鏃などが早期前半に属するものと思われ、磨製石斧は弥生時代の太型蛤刃の再生品と考えられる。

今回の調査の中心的な時期である稲荷台式土器も比較的古い様相といわれる資料から新段階のものと思われる資料まで幅を持って検出されている。このような現象は多くの遺跡で認められ、繰り返しこの地に営みを持ったと通常考えられている。

志木市内の当該期の遺跡は田子山遺跡第32・37・39・47・49地点、城山遺跡第16・22・34・58・60地点、中道遺跡第44地点などで遺物が若干認められている。田子山遺跡では第32地点の土坑から稲荷台式の破片が4点検出され、遺構外からも9点報告されている。第37地点では遺構外から17点の稲荷台式土器の報告がなされている。田子山遺跡はそうした点からも市内では最も早期前半撚糸文系の土器群が発見されている遺跡であるといえるが、その中でも今回の調査のようにまとまった状態で検出されたのは初めてである。また、この時期には竪穴住居跡が存在することが判っており、本地点の周辺に集落跡が存在する可能性が高く今後の調査に期待したい。

なお、今回の撚糸文土器の記述方法は基本的に小林達雄氏を基本概念に（小林 1966）、原田昌幸氏の分類に準拠した（原田 1991）。

### [引用・参考文献]

- 小林達雄 1966 「縄文時代早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ 多摩ニュータウン遺跡調査会  
志木市教育委員会 1996 「田子山遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』 志木市の文化財第23集  
1999 「田子山遺跡第47地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』 志木市の文化財第27集  
1999 「田子山遺跡第49地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』 志木市の文化財第27集  
原田昌幸 1991 『撚糸文系土器様式』 考古学ライブラリー ニュー・サイエンス社



# 図 版





1. 調査区近景



2. 表土剥ぎ作業風景



3. 1区遺構確認状況



4. 1区包含層遺物出土状態



5. 1区包含層遺物出土状態



6. 1区包含層遺物出土状態



7. 1区包含層遺物出土状態



8. 1区包含層遺物出土状態



1. 6号集石礫出土状態



2. 6号集石完掘



3. 反転



4. 2区全景遺構確認状況



5. 216号土坑完掘



6. 216号土坑セクション



7. 2区完掘全景



8. 埋戻し作業風景



1. 旧石器时代出土遺物



2. 6号集石出土遺物



3. 包含層出土遺物



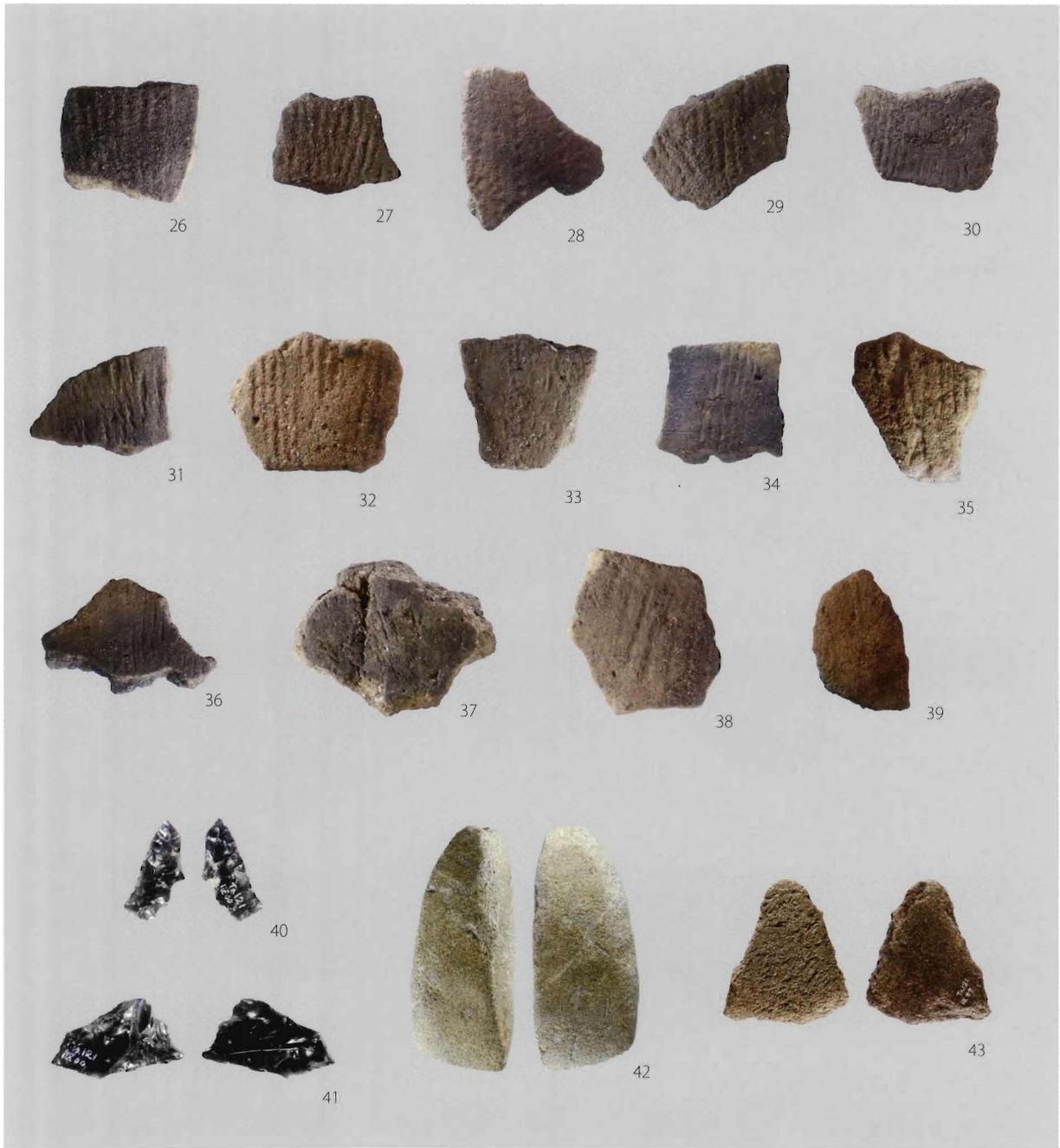
1. 包含層出土遺物



1. 包含層出土遺物



2. 遺構外出土遺物



1. 遺構外出土遺物



2. 12号ピット出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	たごやまいせきだい121 ちてんまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ							
書名	田子山遺跡第121地点埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志木市の文化財	巻次	第50集					
編著者	徳留彰紀 尾形則敏 藤波啓容							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048(473)1111							
発行年月日	平成24(2012)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たごやまいせき 田子山遺跡 (第121地点)	しきしほんちょう 志木市本町 2丁目1680-2	11228	09-010	35°49'53"	139°35'5"	20110912 ～ 20110928	145.73	分譲住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
たごやまいせき 田子山遺跡 (第121地点)	集落	旧石器時代 縄文時代早期  中世以降	集石1基 ピット5本 遺物包含層 土坑1基 ピット1本	石器 土器・石器 陶磁器	旧石器時代のナイフ形石器が遺構外であるが検出された。縄文時代早期前半燃糸文期の資料としては市内で最もまとまっている。			
要約	<p>田子山遺跡は、武蔵野台地の北端部の縁辺に形成された、旧石器時代から近代までの複合遺跡である。分譲住宅建設に伴い、平成23年度に第121地点として発掘調査を実施した。本書はその成果をまとめた発掘調査報告書である。</p> <p>今回検出された遺構は、縄文時代早期前半燃糸文期の集石と縄文時代時期不明のピット5基が検出された。また縄文時代早期前半燃糸文期の遺物包含層も合わせて検出された。そのほか中世以降の土坑1基とピット1基が検出された。</p>							

志木市の文化財 第 50 集

## 田子山遺跡第 121 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 埼玉県志木市教育委員会  
埼玉県志木市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号  
発行日 平成 24 (2012) 年 3 月 31 日  
印 刷 株式会社 三共印刷